
妖怪寄潭

優斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖怪寄潭

【Nコード】

N4460D

【作者名】

優斗

【あらすじ】

陰陽師と狐の女の子のお話陰陽師と狐で恋は実るのか…かの有名な陰陽師阿倍晴明の母親も狐だったという…好きな人のためならば…俺はこの身を捧げよう

く弓張りの月姫く

俺の名前は東葉月あづまはづき

平成の陰陽師とか言われてる

今日も仕事を頑張って家に帰ってきたら…

玄関に人がいた

お前誰だよ…

葉月

「…初めまして」

加奈

「初めまして東葉月君」

加奈

「私の目を見てくださいか？」

怪しいな封邪印を使って…と…これでよし

葉月

「で…どうかしたかな？」

加奈

「しかたないわねかからないなら…」

うわ！何だよいきなり火が飛んできた

青い…狐火か

何だよいったい俺が何かしたんかよ身に覚えなし

く弓張りの月姫く（後書き）

これから頑張って書きますのでよろしくお願いします

く弓張りの月姫く2（前書き）

いやくあの時は死ぬかと思いましたよ（笑） B y e 葉月

く弓張りの月姫く2

加奈

「アハハ（笑）もっと早く避けないと当たっちゃうよ」

葉月

「俺が…何した…！」

加奈

「貴方は私の大切な物を奪って行きました」

加奈

「私の心です…ポ」

葉月

「んな…事…知るかよ…！」

さあ追い詰められたぜ！

加奈

「今度は封邪印なんか使わせないからね」

葉月

「…もうお前の好きにしろ」

とみせかけて…絶対かかるかよ幻術

加奈

「それじゃあ目を見てね」

くそ…仕方ない

渴…ん？

加奈

「うわぁ何よこれ…体が動かない」

葉月

「はぁはぁ…助かりました朱雀の姉さん」

朱雀（良いわよ別に…権化出来なくてもこれくらいわ…ね）

ふう術を使わずに済んだか

さて…

葉月

「お前は何者だ！事としだいによれば陰陽師の名において退治するぞ」

加奈

「わかったわよ…正体と理由を言えば良いんですよ」

いきなり女の子から光が溢れ始めた…

葉月

「君は…」

加奈

「そうよ私は九尾の狐貴方を狙った理由は2日前にさかのぼるわ豆

腐屋にお揚げを買いに行った時に貴方に一目惚れしちゃったのよ
文句ある？」

葉月

「…文句とかは無いけれど…何で俺なんだ…？」

加奈

「んゝ霊力の高さ…かな」

葉月

「なんだよそれ…まあ惚れられたなら仕方ないか…」

めちゃくちゃ可愛いしちなみにこの女の子の格好はポニーテールに
ワンピースと結構いい服を着ていた

しかもアルビノなのか抱きしめたいかんじも見受けられた…正直た
まりません

始まりの鐘（前書き）

あの日は特に色々あったよね〜 B y e 加奈

始まりの鐘

葉月

「そついえば君の名前を聞いて無かったね」

加奈

「加奈ですよろしく」

葉月

「ああよろしく」

ちなみに今の季節は夏だ

葉月

「じゃあそろそろ帰りなさい親も心配しているだろ？」

加奈

「泊めてもらえない…かな？」

葉月

「どうしてだい？」

加奈

「押し掛け新妻加奈ちゃんだから」葉月

「…」

頭打ったか俺も

加奈

「ダメ…かな？」

葉月

「いや〜ダメでは無いが…」いくら狐といえど相手は女の子だ俺の理性が保てるだろうか

加奈

「……グスン」

うわやべえな泣かしちゃったよ

葉月

「わかった今日は泊めてあげる。但し明日は山に帰る事」

加奈

「やったー（ふ…ちよろいもんだな）」

葉月

「今何か言ったか？」

加奈

「何でも無いよ」「そんなこんなで今日という日は終わりをづけようとしていた…あ…今日の晩飯何にしようか…ん〜ま良いか適当にキツネうどんにしましょう」

加奈

「お揚げ二枚ね私」

葉月

「わかったよ…先がおもいやられるな」

何で二枚も…はあやれやれ

なぜキツネうどんごときでこんなに喜べるのかわからん…俺はインスタントが嫌い…では無いのだがインスタントばかり食べていると胸焼けを起こすだから手作り何だが…良く食べるんだよこの女狐もう三杯めだ

呆れてものが言えん

はあ何が押し掛け新妻加奈ちゃんだよ

これじゃー確実に家計は火の車だ

ほんとに

始まりの鐘（後書き）

更新遅くてごめんなさい次回に続け

仕事

あれから1日たった

昨日はノリで家に居ても良いと言ったが…実際犯罪に手を染める気はない…狐が幼すぎるんだパツと見中学生でも通るくらいに

それで話し合いをした

加奈

「おはよう」

葉月

「ああおはよう」

加奈

「今日は何するの？」

葉月

「溜まった仕事をかたずけて陰陽師としての本分妖怪退治をしに行こうかと」

葉月

「…じゃ無くていつ山に帰るんだ？」

加奈

「ん〜とね…いつか必ず」

葉月

「二人で生活できるか！」

実際家計はすでに火の車だった

加奈

「ここにいちや…だめ？」ウルウル

葉月

「まず自分の立場を言ってみな」

加奈

「押し掛け新妻です」

葉月

「嫁が旦那を殺しにかかるか…？」

ついでに幻術もかけるのかとも言いたかったが止めておいた

あ…法珠が光はじめた

葉月

「誰か居るのか？」

式神

「良くわかったな私の主からの言葉を預かって来た心して聞くように」

今晚亥の刻陰陽僚に来るように…との事だ
ちなみにそのお嬢も一緒だ」

葉月

「わかった…それで報酬は？」

式神

「500は出すと言っている」

葉月

「わかった引き受けよう」

何かうやむやになってしまったが仕方ない今日の晩だな

式神

「ふむ…確かに伝えたぞ東の名を継ぐ者よ」

葉月

「おい寝るな重いから」

加奈

「重いつかひどいわよマイダーリン」

葉月

「そうかいハニー…って恥ずかしい事を言わすな」

そんなこんなで陰陽僚

葉月

「ごめんください東家二十三代目当主東葉月にございます式に呼ばれましてただいま馳せ参じました」

加奈

「反応無いね」

キィ

葉月

「ふう空いたか」

中に入って行くとちょうど真ん中の部屋に上司がいた

皆からは月詠と呼ばれてる本名が謎だが術式は月が無いと効果を期待出来ないのでは人によれば月姫とかカグヤ姫とか呼ばれてる

ちなみに女だ

だがだいたい月詠で通っている

月詠

「さてお前達を呼んだのは…なんだったかな？アハハ忘れちゃった…テヘ」

葉月

「仕事でしたよね（笑）」

月詠

「そうそう妖怪退治よ」

葉月

「で…何を？」

加奈

「退治すれば？」

加奈& a m p・葉月

「良いんですか？」

月詠

「おゝハモったね？」

月詠

「ゴホンそれでは本日からの任務を言い与える…女郎蜘蛛の退治並びに近隣の妖怪一掃これだけだ…失敗は許さんぞわかったな」

葉月

「はい」

加奈

「はい」月詠

「場所はまた日を追って教えるちゃんと準備をしておくように」

葉月

「はいわかりました」

加奈

「私におまかせあれ」

月詠

「ときにかなりの老女を連れているな葉月」

葉月

「は？」

月詠

「まさか気づいておらぬのか？この女狐とつに五百歳は越えておるぞ…」

葉月

「…？」

加奈

「ばれちゃった…」

見た目が幼すぎるとかでは無く…嫌になった年下とか考えたらダメなんだな…（泣）
実際妖怪だし

仕事（後書き）

次回に続けます

仕事…2（前書き）

加奈「ふゝ温泉気持良いな」

葉月「横がつるさいな？まさか…」

仕事…2

古都京都から車で二時間今回の仕事場だ…まずは前半部分である女郎蜘蛛を退治しようかと思いい立ち退治に来ている

鬱蒼と茂渡る木々を横目に地図を確認しながら女郎蜘蛛の住処であると言われる洞穴を目指して進んでいた

加奈

「ねーまだ？足痛いよう」

葉月

「この峠の向こうだ…頑張れ」

それにしてもどうして月詠さんはこいつと一緒に行けと命令してきたねだろうか…妖怪なのに家に帰ったら年の事を含めて色々質問攻めにしてやる…とか黒い事を考えていた

葉月

「着いたな」

加奈

「うん」

準備を始めた

俺は自分の武器であり先祖代々受け継いできた四聖獣の剣を装備し札と宝玉四個そしてコンパス…準備完了だ

狐は…凄いプレッシャーだ妖力がだんだんと上がってきてる

それこそ俺でも倒せないくらいの妖力だ

ちなみに四聖獣の剣にはちょうどつばの所に穴が空いている

加奈

「準備完了」

葉月

「俺もだ」

さあ乗り込むか中は暗いでも狐火が有るから困らない

ん？この感じは…？

加奈

「来るよ」

いきなり上から降ってきた

女郎蜘蛛

「おや人間かい九尾の狐が攻めて来たのかと思ったら…ふふふ…」

葉月

「殺るしかない」

先に狐が飛び出した

加奈

「そらそらそら避けないと当たっちゃうよ」

女郎蜘蛛

「！あんた化けてたんだね」

凄い狐火だ質も量も遥かにあの時よりうえだ
隙ができてる…そういう事か

方角は良し障害は無いよしやるか

葉月

「八百萬の神々我に力を」渴

牛頭天皇

「久しぶりだの」

葉月

「よおスサノオ」

牛頭天皇

「その名は言うな照れる」女郎蜘蛛

「…金神！？陰陽師あんたなんて者を…」

牛頭天皇

「ほう女郎蜘蛛か…」

葉月

「勝てそうか？」

牛頭天皇

「やるだけやってみるかの」

女郎蜘蛛

「生きては帰さないあんたは危険すぎる」

葉月

「加奈！サポートにまわってくれ」

加奈

「了解」

さて俺も戦うかもって半時間…それまでには決着をつける

青龍（おい相棒法珠を刀に付ける）

葉月

「いや今回は朱雀の姉さんに頼むよ…だけど変化はしてもらっ

わかった…さっさとしてくれ
青龍

葉月

「オーケー…」

渴

四聖獣の剣が青い光を放ち形を変えていく蒼銀の刀身青い鍔柄から垂れるは藍色の紐紐の先には五方星の飾り四聖獣の剣名を変え青龍刀…苑月青龍（行くぜ相棒）

女郎蜘蛛

「今すぐに殺してあ・げ・る」

葉月

「簡単には殺られるかよ」

牛頭天皇

「ふ…」

靈力集中一点突破

葉月

「青龍刀秘技…神雷斬り！」

加奈

「狐火の舞い」

牛頭天皇

「金神拳…破」

…殺ったか？

牛頭天皇

「まだまだ！葉月！」

くそ…ぬかったか…？

女郎蜘蛛

「痛いじゃないのさ…ぐふ」

足が八本有ったのにいまじゃ三本か…そのうえ血を吐いている所を見ると…内蔵破裂は確実だな…

この勝負貰った…

葉月

「おとなしく退治されてくれ…俺にだって情けは有る」

女郎蜘蛛

「おとなしく殺されろだって？冗談はよしておくれよ…私はこんななりでも妖怪なんだ…あんただって九尾の狐を連れてるじゃないさ…」

葉月

「ああ確かに九尾の狐を連れてる…」

加奈

「葉月…」

葉月

「だがこれは仕事なんでな…済まん最後に言い残す事を言ってくれ」

女郎蜘蛛

「仕方ないわね…私は死なないわよあんたら二人を魂の一片になるまで追いかけてやるわ…絶対に」
権化を使わずに済んだか

葉月

「感謝する」

女郎蜘蛛

「ぐふ…そろそろ時間ね…お礼はいらないわよ陰陽師…この怨み…忘れはせぬぞ…陰陽師…九尾の狐…金神…」

俺は何も言わずに刀を降ろした

加奈

「終わったね…」

葉月

「ああ終わった前半はな」

牛頭天皇

「ではわしはこの辺で失礼するかの」

葉月

「ありがとうございますサノオ」

加奈

「また逢えるよね？」

牛頭天皇

「方角さえ当たっていればわしは主らにいつでも力を貸そう…ただ…女を紹介してくれのう」

葉月

「あははは…お前らしいよ」

加奈

「うわゝスケベ親父」

牛頭天皇

「ふむ…葉月靈力を止めてくれ…」

葉月

「ああまたな…」

加奈

「…またね」

牛頭天皇

「家に帰ったら風呂でも入るかのがっはっはっは」

帰ったか

葉月

「疲れた」

加奈

「今日どうするの？」

葉月

「ふもとに温泉宿が有るから……そこに泊まろう」

加奈

「うわゝ襲われそう」

ちなみに周りは夕方だ帰りたく無いし年の事は温泉宿で聞こう

葉月

「誰が襲つか！」

仕事…2（後書き）

結構長くなっちゃいました次回に続けます

休息

温泉は良いね命の洗濯だ…

明日は任務の後半部分

近隣の妖怪を殲滅だそれにしても女郎蜘蛛退治があんな簡単に済むとは…何か怪しいのだが…倒したには変わりはない

まあ一応あの付近の探索はしておこうか…

腹減ったな出るか

葉月& a m p・加奈

「頂きます」

海の幸と山の幸てんこ盛りだな…旨い

加奈

「おいしいねこれ」

葉月

「ああ旨いな」

俺は酒を頼んだ

葉月

「きつい酒だな」

加奈

「どれどれ…?」

葉月

「どうした…？」

加奈

「ハツくん」

葉月

「な…なんだいきなり…？」

加奈

「かな…体が熱くなってきた」

葉月

「！」

加奈

「ハツくんだ…い好き」

葉月

「よ…酔っ払い」

葉月

「ち…近寄るな…こっち来るな」

加奈

「zzzzだ…い好き…」

ね…寝たか…？

何だよいきなり驚かせやがって

料理はあらかじめ片付いていたので下げてもらった

葉月

「さて…寝るか」

狐を布団に寝かせ俺は部屋のソファで横になった寝れない…

狐はめっちゃ寝てる…酒がキツすぎたな俺は窓の外を眺めていた弓張りの月だ三日月よりも細い狐の…加奈の目…みたいだタバコを吹かして夜空を眺める…か

葉月

「今日は疲れた」

独り言は虚しいな

加奈

「そうだね」

ん？起きてる

あ…寝言か

そろそろ寝るか…

葉月

「お休み…可愛い女狐ちゃん」

休息から仕事へ

今何時だ？

時計は朝の3時を指していた

俺は渴いた体を潤す為に自販機に向かった

スポドリを飲み体を潤してから部屋に戻ると

加奈

「おっはよー」

葉月

「おはようさん」

加奈

「何を考えてるの？引っかけた魚の骨が取れないって顔してるよ？」

葉月

「ああ実はな……」

女郎蜘蛛の事をきちんと話した

加奈

「ごめんね」

葉月

「何をいきなり」加奈

「実はあれ……子供の……今回の本当の敵は親なの……ごめんなさい」

葉月

「訳を話してくれ…」

加奈

「実は月詠さんに口止めされてて…」

葉月

「そうか…」

年の事を絶対に聞き出してやる！

葉月

「わかった…さて今日の任務をやるうぜ」近隣の妖怪殲滅…作戦は全力で叩き潰すそれだけだ

葉月

「札を昨日の内にかなり使ったから権化をしてから向かう」

加奈

「わかった」

四聖獣の剣に法珠をはめた瞬間から剣が光始め朱雀の形になっていく

スザク（やっと出番ね）

葉月

「姉さん頼みます」

スザク（任しなさい）

これを圧倒的と言うのだろうか朱雀の姉さんは俺の霊力を使って燃やす燃やすまわりは火の海…暑い　しかも狐も狐火を使ってるから

余計に暑い

俺もやけくそで火術を使ってる…

葉月

「暑い暑いよこんちくしょー」

加奈

「楽しいな めちゃくちゃ面白い」

スザク（オホホホまだまだイクわよ）

恐いな…

ん…？この感じは昨日の…

老婆

「いい加減にしなこの人間が」やっぱり登場か…

葉月

「女郎蜘蛛…だな」

老婆

「ああそくだよあたいが女郎蜘蛛さ」

加奈

「逃げなきゃ」

葉月

「殺す…俺に失敗は…無い」葉月

「姉さんありがとうございましたここからが本気の仕事…なんで」

スザク（そうかい…あたいの変化を使いな）

葉月

「助かります姉さん」

俺はすぐさま法珠を剣から外して元に戻したそしてまたすぐに朱雀の魂を憑依させた

朱雀弓…炎ホムラ

スザク（気持良いわね）

葉月

「終りにしてやるすぐに済ませる！」

加奈

「逃げるよ葉月君」

葉月

「逃げれるか！こいつは俺が殺す」

老婆

「やれるもんならやってごらん」

葉月

「うるせー俺は平成の陰陽師…東葉月だ！全力で殺してやる…炭になれるとか考えんなよ！跡形もなく焼き殺してやる！」

休息から仕事へ（後書き）

次回に続きます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4460d/>

妖怪寄潭

2010年11月11日07時26分発行